The LinguistIC

Tuesday, October 29, 2026 ISSUE 5

時・条件を表す副詞節の動詞の語形の謎

—英語仮定法と動詞の語形の変遷—

皆さんが高校時代に受けられた英語の授業では、「時・条件を表す副詞節では、未来のことも現在形を用いる」と教えられたことだろう。事実、テストでも時・条件を表す副詞節において動詞の適切な形として現在形を答えさせるような問題が作られている。

では、なぜ時・条件を表す副詞節では、未来のことでも現在形が用いられるのだろうか。本稿では、堀田(2026)の説明を基に、想定される仮説を批判的に検証した上で、「法(mood)」という概念と動詞の語末音に関する歴史的変化が、時・条件を表す副詞節の動詞の語形に関与したことをまとめる。

まず、時・条件を表す副詞節とは、主節(文の中心)に対してwhen(いつ)やif（もし〜)という時や条件に関する情報を付け加える節（主語と動詞を含んだかたまり)のことである。たとえば、(1a)の[ ]内は、主節の「(我々が）出かけ」る時を副詞的に修飾することで指定しており、時を表す副詞節に該当する。主節の内容からも、雨が降り止むのは未来のことであることがわかるが、当該の節では未来表現のwill stopではなく、現在形のstopsが用いられている。また、(1b)の[ ]内は、主節が述べている買い物へ行く条件を述べており、条件を表す副詞節に該当する。副詞tomorrowが現れていることからも未来における条件を述べていることがわかるが、当該の節では未来表現のwill beではなく現在形のisが用いられている。

(1) a. We're going out [when the rain stops].
b. [If it is fine tomorrow], I will go shopping.

このように、実際にできごとが起こる時間軸と、それを表す動詞の時制に齟齬が生じる。そのため、学校英文法では冒頭のように文法規則として扱われている。なお、他にも、時・条件を表す副詞節をとる従属接続詞として、時の場合はafter(〜する後に)やas soon as(〜するとすぐに)等、条件の場合はin case(〜する場合に加えて)やonce(いったん〜すると)等が挙げられる。

ではなぜ、「時・条件を表す副詞節」では未来のことも現在形で表すのだろうか？堀田(2026)は、英語史的な観点から表題の問いへの解説を行なっている。その中で、堀田はある作業仮説を立て、それを否定する形で、英語史的説明の妥当性を主張する。その作業仮説とは、(2)のように副詞節でもwillが用いられる文を仮定した場合に、「willが2度現れてうるさく感じられるから。主節で一度だけwillを用いれば文全体が未来であることを十分に示すことができるため、if節ではwillは出さずに済ませられる」とするものである。

(2) If it will be fine tomorrow, I will go shopping.

これに対し、堀田は、(3)のように主節にwillが現れないことでwillの重複が起こらない例を指摘して、この作業仮説が誤りであると棄却している。(3)の例では、主節の内容が未来のできごとに対する勧誘、命令、推量を表しているものの、未来表現のwillが用いられていない。つまり、たとえ副詞節にwillが用いられたとしても、willの重複が生じない。それにもかかわらず、(3)の未来の事象を表す副詞節内では現在形が用いられている。

(3) a. Let's go home [before it rains].
b. Tell her to come in [as soon as she arrives].
c. You must enjoy your happiness [while it lasts].
（堀田 2026: 76-77）

これらの例から、willの重複を避けるためとする仮説では、副詞節で現在形が用いられる理由を十分に説明できないことがわかる。

堀田の説明では、主節にwillが現れない例の存在によって、上記の作業仮説が退けられているが、このほかにもこの作業仮説の問題点を指摘することができる。実は、時・条件を表す副詞節を含む文では、if節と主節の両方にwillが現れる文も存在する。以下の文は、条件を表す副詞節を含んでいるが、その述語がwillを含んでおり、主節のwillとの重複が生じている。

(4) If he will help me, I'll be able to finish it. （Wisdom, 第3版）
（彼が手伝ってくれるのなら、それを仕上げることができるでしょう）

なお、この文では、条件のif節にwillが現れており、一見すると表題の規則に違反しているように思われるかもしれない。(4)において条件の副詞節内でwillが使用できるのは、このwillが「単純な未来」ではなく「意志」を表しているためである。つまり、元の規則は未来表現のwillが用いられないとするものであるため、意志を表すwillは条件の副詞節でも使用が可能なのである。

willの重複が起こる事例はほかにも存在する。それは、ある文が文中で名詞的に機能する節（名詞節）を含み、主節と名詞節の両者がwillを含む場合である。(5)では、if節が主節の動詞の目的語として「今年サンタが家に来てくれるのか（を)」という名詞的な意味を表している。

(5) My son will ask me if Santa will visit our house this year.
（息子は今年サンタが家に来てくれるのか尋ねるだろう）

このような名詞節では、未来のできごとを表すwillを使うことが未来のできごとを表すwillを使うことができる。(5)でもwillの重複がみられるにもかかわらず文法的であることから、willの重複を理由とする上記作業仮説が誤りであることがわかる。

これまで、堀田が立てた作業仮説が成り立たないことを、堀田の提示する証拠以外を補足することで確認してきた。ここで注目したいのが、堀田が主張する英語史的な背景に基づく説明である。堀田は英語における動詞体系の歴史変化と法(mood)の歴史的変化を結びつけることで、表題の問いの解決法を提案している。

法とは、話し手の心的態度を動詞の語形によって表すもので、英語だと直説法、仮定法、命令法といった法が存在する。中でも、直説法と仮定法とは、文／節が表すできごとが現実／非現実について述べているのかを明確にするための語形変化を指す。直説法とは、あることがらを現実世界のできごととして表現する際に用いられる法であり、現在における現実を表す場合には現在形を用いる。たとえば、(6a)の文は現在における現実世界の天候を述べた文であり、be動詞の時制として現在形が用いられている。これに対し、仮定法とは、あることがらが非現実の仮想世界のできごととして表現する際に用いられる法であり、現在における仮想のできごとを表す場合には過去形を用いる。(6b)では仮想のできごとを述べる動詞であるwishが用いられており、その従属節では現在における仮想世界（つまり、現実世界とは異なる希求する世界）が述べられている。この時、従属節内のbe動詞は現在のことがらを述べているものの、isではなくwereが用いられている。

(6) a. It is fine today.
b. I wish it were fine today. （堀田 2026: 78）

初期近代英語期までは直説法と仮定法という2つの法は現代英語よりも動詞の語形によって区別されていた。たとえば、be動詞であれば、3単現の形は直説法ではisとなるが、仮定法では原形と同じbeとなっていた。なお、現代英語の(1b)の文に相当する表現は、初期近代英語期までは(7)の文が用いられ、条件の副詞節の動詞は原形をとっていた。

(7) If it be fine tomorrow, I will go shopping. （ibid.: 79-80）

なぜ(7)では仮定法が用いられるのか。現代英語の感覚でいうと、「明日晴れたら」という条件は、将来の天候への言及であり、その点では時間として未来を表していることになる。これに対し、近代以前の英語では、時・条件を表す副詞節においては、できごとの時間軸を指定することよりも、現実／非現実を明示することに重きが置かれていた。つまり、「明日晴れる」というのは、未来のできごとであることよりも、「天候について頭の中で想像している」という非現実であるとする認識が表現された。このように、特に、時・条件を表す節では、できごとが未来に起こることを示すことよりも、そのできごとを非現実であると表現する「仮定法」が用いられていたのである。

では、なぜ現代英語において、時・条件を表す副詞節では現在形が用いられるのか。堀田によると、これには英語の動詞の語形の歴史的変化が関与するという。実は、古英語期から中英語期、さらに初期近代英語期にかけて、英語の動詞体系は大きく変化した。具体的には、古英語期から緩やかに動詞の語末音が弱化・消失するという現象が起きた。これに伴い、動詞の形によって直説法と仮定法を区別する仕組みが次第に縮小していった。つまり、直説法と仮定法が同じ動詞の語形によって表現されることになる。

直説法と仮定法で共通の動詞の語形が使用されるにあたり、いずれの法の語形が用いられることになるか。古来、直説法は、頻度の高い基本的な法であったのに対し、仮定法は直説法ほど頻度は高くなく、特殊な法であった。これらの法の区別が曖昧となれば、基本的な法であった直説法が仮定法を飲み込むという形で統一されていくのが自然な流れであった。仮定法が直説法に飲み込まれることで(7)の文は(1b)のように表現されるようになり、英語の歴史において長らく重視されてきた「仮定法重視」の発想が失われた。

これが時を経るにつれ、時・条件の副詞節の内容は、仮定のできごとを非現実とみなすのではなく、その形式から時制の観点から解釈されるようになった。つまり、非現実の内容が現在形と同じ語形によって表現されているために、あたかも直説法の現在形が使用されていると捉えられるようになる。堀田曰く、表題の問はそもそも問い自体が不適切であり、「時・条件を表す副詞節では未来のことも現在形で表す」という規則が、そもそも英語史の流れに沿っていないのである。

以上、本稿では、「時・条件を表す副詞節では、未来のことも現在形で表す」理由について、堀田 (2026)による英語史的観点からの主張をまとめた。堀田の立てたwillの重複を避けるためであるとする作業仮説は、堀田が指摘する重複が起こらない事例のほか、意志を表すwillを含む副詞節や、willを伴う名詞節の存在により棄却される。また、英語史の観点からは、仮定法と直説法の区別が次第に曖昧になったことが、現在の用法につながったとわかった。次回以降、英語史の観点だけではなく、統語論の観点からも今回取り扱った用法がどのような歴史的変遷を経て現在の形になったのかさらに調査していく。

引用文献
堀田隆一 (2026) 『英語史で解く英文法の謎　なぜ「3単現のs」をつけるのか』NHK出版, 東京.

（堀江愛佳）

“Notes and Queries”

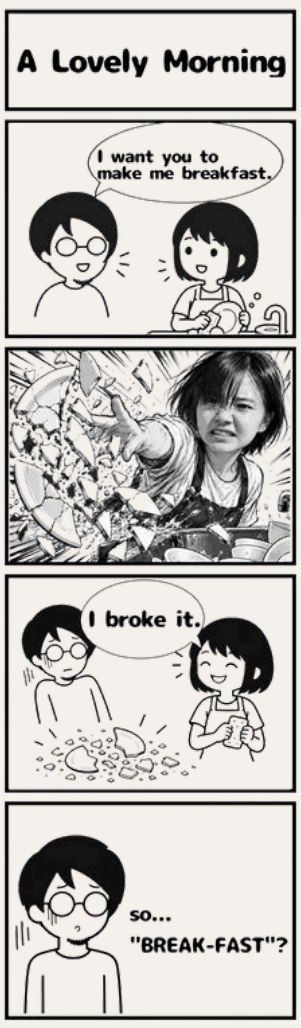
投稿募集中！！

今号から始まりました新コーナー“Notes and Queries”では、皆様からのご意見や質問を受け付けております。

このコーナーは、読者の皆さんが日頃の生活や語学で疑問に思っていることや、ことばに関する雑感を投稿していただき、現代英語学科三輪健太先生監修の下、本紙記者が回答するものです。テキストの解説を読んだけれども納得ができないこと、ある言語表現がなぜ成立するかわからない。そんな時に、ぜひ質問をお寄せください。素朴な質問でも問題ありません。ことばに関して不思議に思っていることや、困っていることがあればなんでもご質問ください。

“Notes and Queries”への投稿は、「【The LinguistIC】N&Q投稿フォーム」で受け付けております。

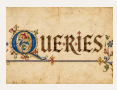




（宇田川凜）



今号のNotes & Queriesでは、2件のQueriesと1件のNoteを頂戴いたしました。以下で、益子記者と三輪が回答いたします。



「The linguistIC 3」を拝見させていただきました、K.H.です。非常に興味深く、syntax初心者でも分かりやすい読み物を提供していただき、ありがとうございます。

特に、「「僕」「私」「わし」VS “I”」の役割語と話し手の個性についての考察は、私の研究分野である社会言語学にも通じる部分があり、非常に参考になりました。

巻末に「なんでもご質問ください」とありましたので、恐縮ながら質問させていただきます。先程の役割語について、私のアニメオタクの女性の友人は、よく「僕」を一人称として使います。錦織(2023)は、この現象を「わたし」という女性性を強く感じる表現を避け、性別により柔軟な「僕」という表現を使っているのではないか、と論じているのですが、みなさんはこの現象についてどう考察されるでしょうか。私も先行研究を探してみましたが、参考になるものが錦織(2023)程度しかなかったため、僭越ながら興味があって質問させていただきました。

（大学院生1年　K.H.さん）

1. はじめに

ご紹介いただいた錦織 (2023)をゼミ内で拝読した。この論文はYouTubeチャンネル『ゆる言語学ラジオ』でも取り上げられたようである。錦織は日本語の人称代名詞の歴史などを中心にまとめ、「僕」に関しては、太平洋戦争後に文部省が検定教科書にて男女の自称詞を分けたことに触れている。つまり、男の子は「僕」、女の子は「私」を使うよう指導された。しかし、近年の女性の社会参画が進み、単純なジェンダー区分が薄れる中で、「私」に付与されていた女性性を避けるために、「僕」を使用する人が増加しているのではないかと考察されている。

確かに部分的には共感できる結論ではあるものの、論文の中でその根拠が示されることはなく、あくまで一考察として受け入れるにとどまった。そこで本記事では、上記質問への回答として、1人称「僕」を使う女性は、なぜ「わたし」ではなく「僕」を使うのかという問いについて、ゼミ内で考察した結果を述べる。

2. 仮説

ゼミ内で議論した結果、以下の3つの仮説が立てられた。

・周りの人たちから影響を受けた説
・歌詞からの定着説
・かわいいという印象からそれに倣って使い始めた説

これらの仮説を1つ1つ見ていこう。

2.1. 周りの人たちから影響を受けた説

この仮説は、1人称に「僕」を使用しているあのちゃんという女性テレビタレントのエピソードをもとに立てられた。あのちゃんは『24時間テレビ47』に出演した際に、自身のことを「僕」と呼ぶ理由を明かしている（Sirabee, 2024）。あのちゃんによると、周りの人はみんな自分のことを「拙者」とか、「某」とか、「我」とか言う子しかいなく、その影響で僕呼びを始めたと語っている。また、「私」って言えない思春期を送ってきたので、自分らしく好きな呼び方をしたかったとも語っていた。

このエピソードから、周りの人が一人称「僕」を使っていたため、その影響を受けて自分も1人称「僕」などを使い始めたのではないかという説がでた。実際に1人称「僕」を使っている女性の方のエピソードから考察されたため、説得力があるように見えるが、この仮説には1つ問題がある。それは影響元がなぜ1人称「僕」を使い始めたのかというものだ。最初に1人称「僕」を使い始めた人は、使い始めた理由として、周りが使っていたからとはならないはずだ。そのため、この仮説のほかに理由があると考え、他の仮説を立てた。

2.2. 歌詞からの定着説

Chat GPTに女性の「僕」使用の先駆について質問をしてみると、歌詞からの定着説が挙げられた。Chat GPTによると、上述のとおり20世紀後半には「僕」が男性の自称詞として確固たる地位を築いていた。しかし、1970年代に女性フォークソング歌手の森田童子さんが「さよなら ぼくの ともだち」や「僕たちの失敗」を発表し、その中で1人称「僕」を使用した。これが始まり近年に見られる女性の「僕」使用のとされている。そこから、1990年代後半から2000年にかけて宇多田ヒカルさんや浜崎あゆみさんなどによって、「僕」が女性歌手の歌詞にも広く定着したと述べている。つまり、70年代に歌謡界では女性による「僕」使用が認められるものの、その流れは90年代後半になるまで息を潜めていたことになる。

では、なぜ20年ほどの年月を経て、歌謡界で女性の「僕」使用が再燃したのだろうか。三輪先生の話では、1993年に『高校教師』というドラマで森田童子さんの『僕たちの失敗』が主題歌に選ばれ、ドラマの大ヒットとともにこの楽曲もリバイバルヒットしたという。つまり、93年のヒットの数年後に、女性アーティストによる「僕」使用が見られるようになるのである。ここに、森田童子さんの影響は少なからず影響しているのではないだろうか。その後、こういった曲が浸透したことによって影響を受け、「僕」を使う女性が増えたのではないのだろうか。

2.3. かわいいという印象からそれに倣って使い始めた説

昨今のアニメや漫画では、「ぼくっこ」と呼ばれるキャラクターが多く登場する。「ぼくっこ」とは、自身のことを「僕」と呼ぶ女性キャラクターを指す。こういったキャラクターたちは人気があり、「ぼくっこ」がかわいいという印象を抱いたために、その憧れから「僕」を使用しているのではないかというのが本説だ。実際に、1人称「僕」ではなく「俺」ではあるが、この仮説と似たような理由で使い始めたと語っている女優の波瑠さんという方がいる（サンスポ, 2022）。波瑠さんは自身のことを「俺」と呼ぶことがあり、その理由について、地方の方で方言の1人称「オラ」をつかう女性をかわいいと感じ、それから「俺」を使うことがあると語っている。このことから、女性が1人称「僕」を使う理由として、アニメや漫画などのキャラクターが使用しているのをみて、かわいいと感じた結果、それに倣って使い始めた可能性はあるのではないだろうか。

3.考察

以上の仮説から、女性が1人称「僕」を使うのは、かわいいといった憧れから使用しているのではないだろうかと考える。「アニメでキャラクターが使っていてかわいかったから」、「好きな歌詞で使っているのを聞いて、影響を受けたから」といった理由から、女性が1人称「僕」を使用し始めたのではないかと考察する。

引用文献

サンスポ (2022) 「波瑠、一人称が「俺」になる理由「東京都民だから」. サンスポ. 2022-07-18. 波瑠、一人称が「俺」になる理由「東京都民だから」 - サンスポ

Sirabee (2024) 「『24時間テレビ』あのちゃん、“ぼく”呼びをする理由 「どん底まで落ちて…」」. Sirabee. 2024-09-01.『24時間テレビ』あのちゃん、“ぼく”呼びをする理由 「どん底まで落ちて…」 – Sirabee

錦織裕之(2023) 「なぜ彼女は自分を「ぼく」と呼ぶのか:人称代名詞の一考察」『大妻女子大学紀要』, 32, 47-54.

（益子晃）

[1] 海外の方と会話をする際に、同じ接続詞や前置詞を繰り返して使用する時があります。これは、海外の方にとって不快と思われることはあるのでしょうか？
[2] また、会話を振り返った際に「こうすればよかった」と思う時があります。フィードバックで後悔することを減らすために会話の中でできることはありますか？
英会話力を鍛えるために「シャドーイングをしながら、表現や会話の仕方を覚える」といったやり方で英語学習を進めています。ですが、より効果を発揮するためには英会話の回数を日常生活の中で増やすべきでしょうか？それとも半年に1回や数ヶ月に1回などの定期的な周期で、実践的な英会話(例:学内掲示板で掲載されるクルーズ船の通訳ボランティアなど)で試す方がいいのでしょうか？

（未来教養学環1年　Yakannさん）

[1]の疑問は、英語学習者、特にある程度学習を重ねた者であれば、なおさら気になる点ですよね。なぜならば、我々は英語学習をしていると、「英語では同じフレーズを繰り返し使用することが避けられる」と教え込まれるからです。このような情報は、時に英語学習者にとって脅迫のように響くものです。Yakannさんも、おそらくこのようなところから、上記の不安を吐露されているのだと予想します。

ただ、ご質問いただいたのは、接続詞と前置詞といった機能語の繰り返しの使用の是非に限定するならば、その心配は不要です。これらの機能語は、対象・事象間の位置関係や時間関係、その他多くのものの関係を示すのに用いられます。接続詞にせよ、前置詞にせよ、これらの関係を示す語の多くは、代替のきくものではありません。たとえば、前置詞inが表す位置関係は、in以外の語で表すことができません。そのため、inで表すべき関係が連続した場合、そこではinを繰り返すしかないのです。

そのため、会話の際に機能語の重複が気になることもあるかと思いますが、そこは気にせず使用しましょう。あと、さらに言うと、第二言語学習者が頑張って会話を試みている時に、多少の誤りがみられたからといって不快に思う人が仮にいたとしましょう。その場合は、その人の了見の狭さの方が問題だと個人的には思います。

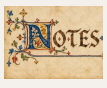
続いて[2]について、ゼミ内で意見を募りました。そこであがったのが、「後悔するのが良いのではないか」という意見でした。Yakannさんは「フィードバック後悔を減らすために」会話でできることを質問されていますが、それと同時に、次の文では「英会話力を鍛えるために」という目的も掲げられています。これは、どちらが重要な目的であるかは自明だと思います。ゼミ生曰く、後悔や反省がないところに英会話力の向上はないとのことです。もしYakannさんが英会話力の鍛錬を第一に考えるならば、どんどん後悔や反省をしていく方が良いとの意見でした。

また、これは私の意見ですが、Yakannさんは「(シャドーイングにおいて）より効果を発揮するために」英会話の頻度を検討されていらっしゃいますが、ここでも新たな目的が設定されています。Yakannさんのように、目的意識を持って判断することは非常に重要です。ただ、上述のとおり、最大の目的は「英会話力を鍛える」ことであり、そのための「効果的なシャドーイング」をされているはずです。つまり、シャドーイングは英会話力向上のためのトレーニングの1つであって、そこで効果をあげるために英会話に励むというのは、目的と手段が逆転しているように感じました。

話を質問に戻します。英会話の回数を増やすべきか、ある英会話を実践する機会に参加するべきかという質問ですが、この2つの選択肢は相互に排他的な（つまり、どちらかしかだめな）ものではないと思われます。どちらも参加したくて、尚且つ金銭やスケジュールの条件が許すのであれば、どちらも参加するといいと思います。

幸い、本学にはChat Hourが設けられています。5100教室に足を運べば、現代英語学科の学生でなくても、英語を話す環境に身を置くことが可能です。学生生活というのは、身を置く環境がパラメータとなって、自身の将来を左右していきます。たとえば、図書館に毎日通う学生は読書量や学習量が増えるでしょう。サークルの部屋で多くの時間を過ごす学生は、そこでの知見や経験を蓄積するでしょう。Student Loungeで談笑する学生は、友達との思い出が増えるでしょう。それと同じように、5100教室に足繁く通う人は、英会話力を高めます。身を置く環境ひとつとっても、自身の将来を左右する選択です。なので、もし「英会話力を鍛える」ことがYakannさんの目的の中で上位にあるのであれば、5100教室に足を運ばれることをお勧めします。

（三輪健太）



各回読んで感じたことは、「自分が普段考えている英文法は、もっと深く学ぶことでより面白さを感じれるんだな。」と思いました。特にThe LinguistICの中で広告を例に扱ったり日本語とリンクさせながら文法に関して述べられているところが、受験や資格勉強だけでなく日常から見た英語の全体像を学べるのが面白い部分だなと感じました。

（未来教養学環1年　Yakannさん）

コメントをいただきありがとうございました。できるだけ皆さんに興味を持っていただけるよう、日頃の英語学習や日常の発話の中に眠っている言語学的な面白ポイントを掘り起こすことを意識しています。この「N&Q」は、読者の皆様のことばに関する疑問や語学での相談に対応していきたいと思っております。これからも、ぜひコメントや質問をどしどしお寄せください。お待ちしています。

（三輪健太）

Instagramをやってます

The LinguistICは、本紙情報を発信するためのInstagramを更新しています。刊行の案内や作成風景などを発信していく予定ですので、ぜひフォローをお願いします。

右のリンクからご覧いただけます→

@THE_LINGUIST_IC

The LinguistIC　第5号

発行日	2026年10月29日
発行者	現代英語学科　三輪健太ゼミ
編集長	植木綾那
監修	三輪健太
記事執筆者	4名
レイアウト	三輪健太

※オンラインからでもご講読いただけます。
右のリンクからダウンロードしてください。

最新刊はコチラから　　バックナンバーはコチラから